

文部科学省後援

「総合的な英語力」を育てる
English Rich な授業
グッドプラクティス・アワード

English Rich Teaching Good Practice Award

入賞実践報告



2026 年 9 月

ブリティッシュ・カウンシル

はじめに

この 10 年、日本の学校における英語教育は大きく変化してきました。生徒が英語で自分の経験や考えを伝え、他者と意見を交わすなど、実際のコミュニケーションを意識した言語活動が広がっています。学習指導要領においても、4 技能 5 領域を通して、実際のコミュニケーションで活用できる「総合的な英語力」の育成が重視されています。

ブリティッシュ・カウンシルでは、文部科学省や教育委員会等と協働し、全国の英語教員の指導力向上に、教師と生徒が豊かに英語を使う「English Rich」な授業づくりを推進してきました。それは単に英語の使用量を増やすことではなく、生徒が英語を実際に使いながら、考え、伝え、他者と関わる機会が豊かに提供される授業です。

生成 AI や自動翻訳などの技術が急速に発展する時代だからこそ、自分の考えを持ち、異なる背景や価値観を持つ人とつながり、対話を通して理解を深め、ともに新しいものを生み出していく力が、これまで以上に求められます。英語を「人とつながるためのことば」として実際に使う経験は、その大切な基です。

こうした授業づくりの取り組みを更に促進すべく、この度、「総合的な英語力」を育てる English Rich な授業の実践事例を募集しました。全国の国公私立校から寄せられた実践は、学校や生徒の背景、学習目標もさまざまでしたが、共通していたのは、英語を単に「学ぶもの」としてではなく、英語を使って考え、伝え、学び、他者や社会と関わるための手段として活用させようとする姿勢でした。思考を促す発問、4 技能 5 領域を結び付けたコミュニケーション活動、ICT 活用、バックワード・デザイン、一人ひとりの学びを支える工夫など、多様で創意に富む取り組みに審査員一同深く感銘を受けました。

中でも入賞実践には、英語力の伸長だけでなく、学習意欲や自信、思考力、他者と協働して学ぶ姿勢など、生徒の多様な成長と共に、それらを導いた教師の継続的な取り組みと根拠のある指導方略について多岐にわたって報告されていました。また、形成的・総括的評価、外部試験、生徒の振り返り等を通して、その成果が多面的に捉えられている点も特徴的でした。

審査委員会による厳正な審査を経て選出された実践を、本報告書でご紹介します。それぞれの実践から、先生方がご自身の教室で生かせるヒントを見つけていただければ幸いです。このアワードを通して優れた実践が共有され、生徒一人ひとりが英語を使って自分の世界を広げ、人とつながり、ともに考え、より積極的に社会と関わる力を育む英語教育が、さらに広がっていくことを願っています。

ブリティッシュ・カウンシル

2026 年 9 月

本実践報告書は紙幅の関係からやむを得ず割愛している部分も多くあり、紙面には実践内容の一部しか反映されておりません。その旨ご理解並びに了承いただきますようお願いいたします。

受賞者一覧

ベストプラクティス・アワード

- 山形県立東桜学館中学校・高等学校 高田 悠幾 教諭 4
「4 技能 5 領域を統合するパフォーマンステストの中核化」
- 新潟市立万代高等学校 根立 望 教諭 6
「英語力と自己肯定感を育む英語授業を目指して」
- 福井県立藤島高等学校 三仙 真也 教諭・小林 香織 教諭 8
「本質的な『やり取り』と思考力向上のための英語授業改善」
- 福岡県立修猷館高等学校（福岡県立香住丘高等学校高等学校（当時））山田慎太郎 教諭 10
「教科書を最大限活用した 4 技能統合型の授業実践」

グッドプラクティス・アワード

（中学校部門）

- 大阪府立富田林中学校高等学校 小田 琴雪 教諭 12
「批判的思考力を用いた『提案型ディスカッション』」

（高校部門）

- 新潟県立高田高等学校（当時） 長谷川 誠 教諭 14
「豊かな英語使用を引き出す 4 技能統合型授業デザイン」
- 新潟県立高田商業高等学校 長谷川 誠 教諭 16
「英語使用の自信を育む発問と足場架けの工夫を伴う授業デザイン」
- 茨城県立水戸第一高等学校 花沢 典行 教諭 18
「やり取り型類似タスクの構造化と反復による発信力の向上」
- 横浜市立横浜サイエンスフロンティア高等学校 今西由美子 教諭 20
「主体的にやり取り・発信する高校英語授業」
- 鳥取県立鳥取西高等学校 松田 裕史 指導教諭 22
「発問にこだわり『深い学び』を実現する高校英語の授業デザイン」
- 佐賀県立佐賀東高等学校（当時） 石橋 俊 教諭 24
「CLIL と SDG s 活動を通じた英語力と社会性の向上」

インクルーシブプラクティス・アワード（特別賞）

- 大阪府羽曳野市立はびきの埴生学園 石川 真美 教諭 26
「支援学級 7 年生 個別最適学習×協同学習×おもいやり」



BEST PRACTICE AWARD

山形県立東桜学館中学校・高等学校 高田悠幾教諭



4 技能 5 領域を統合する パフォーマンステストの中核化 (高校 1-3 年生)



「知っている」から 「使える」英語への転換

本実践は、検定教科書『ENRICH LEARNING ENGLISH COMMUNICATION』（東京書籍）を知識習得の対象としてではなく、英語を使いながら学び、探究するためのリソースとして活用し、4 技能 5 領域を統合的に育成することを目指した取組です。単元を通じた継続的な言語活動を土台とし、スキットやプレゼンテーション、ディベートなどのパフォーマンステストを中核に据えた授業モデルが構築されました。

特徴の1つ目は、「Using English to Learn」の日常化で、英語を学習対象として扱うだけでなく、英語で思考し発信する機会を継続的に設定しました。授業冒頭には、単元の内容に関連したスモールトークを実施し、既習の語彙や表現を実際のコミュニケーションの中で活用し、授業終末には帯活動を設け、その日に学んだ内容について即興で意見交換を行いました。



多面的なパフォーマンス テストを核に単元設計

特徴の2つ目は、単元の目標や学習段階に応じて多様なパフォーマンステストを設定し、学習のゴールを明確にした点です。教科書の状況設定を活用したスキットでは、身体表現を取り入れながら英語を使用し、表現の楽しさや伝える工夫を学び、スピーチやプレゼンテーションでは、教科書のリーディングで得た情報を自分なりに整理し直し、発信するタスクを設定しました。さらに、教科書

の内容や自ら調べた情報を根拠として立論する準備型ディベートや、未知の反論に対応する即興型ディベートも採用しました。

3 つ目の特徴は教員の役割の変化です。検定教科書の構造を活用することで教材作成の負担を軽減し、その時間を評価指標の精緻化や発話へのフィード

【実践のポイント】

- ❖ スモールトークや意見交換、アウトプット機会を毎時間確保し、英語を使いながら学ぶことを日常化。
- ❖ 単元ごとにスキット・プレゼンテーション・ディベートなど、多面的なパフォーマンステストを設定。
- ❖ 教師は「知識の伝達者」から、生徒が英語を使いこなすプロセスに伴走する「ファシリテーター」へ。
- ❖ 帯活動で形成的評価を重視し、生徒の発話を価値づけたフィードバックを提供。
- ❖ パフォーマンステストで、生徒相互のピアアセスメントを導入。他者のパフォーマンスを分析・評価することは、メタ認知能力の育成や肯定的な学習文化の醸成に寄与。
- ❖ GTEC では顕著な伸長が見られ、論理的な読解力や記述力も向上。
- ❖ 未知の話題にも既習事項で挑戦する姿勢が定着し、英語で意図を伝え抜こうとする言語的レジリエンスを身に付け、主体的な「言語使用者」へと変容。

バックの充実に充てました。教員は知識の伝達者としてだけでなく、生徒が英語を使いながら学ぶ過程に伴走するファシリテーターとしての役割を担っています。



主体的言語使用者、 能動的な学習者へ成長

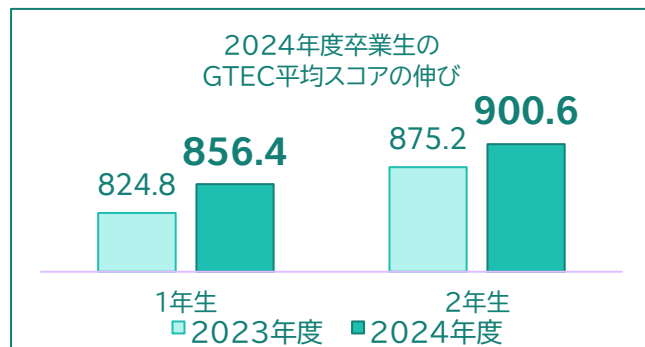
評価では、英語の知識量だけでなく、「英語を用いて何ができるようになったか」という運用能力や学習姿勢の変容を重視しました。パフォーマンステスト、日常的な言語活動、相互評価、外部試験の四つの側面から構成されています。

まず、単元の出口として実施されるスキットやプレゼンテーション、ディベートなどのパフォーマンステストを総括的評価の中心に位置付けました。事前に共有したルーブリックを用い、言語の正確性だけでなく、論理構成や非言語的な表現、相手に伝えようとする姿勢なども評価対象としました。評価項目はできるだけ簡潔にし、ALT や複数の教員との間で評価のばらつきが生じないように調整を行いました。

日常的な帯活動では形成的評価を重視しました。スモールトークや即興的な意見交換の場面において、生徒の発話を観察しフィードバックを継続的に行い、改善点や優れた表現をその都度共有しました。このような積み重ねによって、生徒が失敗を恐れずに英語を使うことのできる環境を整えることにつながりました。

パフォーマンステストではピア・アセスメントも採用し、共通のルーブリックを用いて互いの発表を評価することで、生徒が自らの課題や成長を客観的に捉える機会としました。相互評価は学級全体で学び合う環境づくりにもつながりました。

成果としては、GTEC において顕著な伸長が見られました。2024 年度卒業生の CEFR-J B1.2～B2 レベルに該当する生徒数が、前年度の 24 名から 42 名へ増加しました。また、アウトプット活動を重視した実践でありながら、リーディングやリスニング



でも高い成果が見られたのは、生徒が教科書の情報を受動的な知識ではなく、「自ら使用する言語」として能動的に処理する姿勢が高まったからであると分析しています。さらに、大学入試の記述模試では、偏差値 65 以上の生徒数が全学年で増加しており、論理的思考に基づく読解力や記述力の向上も報告されました。

定性的な成果としては、生徒がスキットやディベートを通して、自分の意図を伝えようとする言語的レジリエンスを身に付けたことがあります。また、授業最後の意見交換では、学習した語彙や表現を自らの文脈で活用する姿が常態化するようになりました。

英語を自らの可能性を広げる道具として捉えるようになり、能動的な学習者へと変容したのは本実践の大きな収穫です。卒業生からも、大学での英語による講義やプレゼンテーション、留学先での学習や議論において、本実践で培った力が生かされているとの報告が寄せられました。



学び合いを支える 授業モデルへ

今後の計画は、本実践で確立したパフォーマンステストを核とした授業モデルをさらに精緻化し、再現性の高い指導へと洗練することです。また、ピア・アセスメントの質の向上を図り、生徒が成長をメタ認知しながら高め合う学習文化の醸成を目指しています。地方公立校でも世界に通用する力を育成できるという知見を地域へ共有し、実践と発信を継続していきます。



発信活動を重視した一方で、リーディングやリスニングにおいても過去最高水準の成果が見られました。これは、生徒が「発信するために読む・聞く」という目的意識を持つようになり、情報を主体的に処理する力が高まったためであると考えています。



BEST PRACTICE AWARD

新潟市立万代高等学校 根立 望教諭

英語力と自己肯定感を育む英語授業を目指して（高校1-2年生）



英語を使うことが当たり前になる授業環境の構築

「生徒がのびのびと英語で自分の考えを表現できるようになること」と「発話量を増やすこと」を目標として実践に取り組みました。背景には、入学時の英語学力テストの結果が低かったことや、英語を話すことや英文法に苦手意識をもつ生徒が少なくなかったことがあります。そこで、英語を使う経験を日常的に積めるよう、「英語を使うことが当たり前」の授業環境の構築を目指しました。

授業では、ペアやグループでの活動を中心に据え、生徒同士が英語でやり取りする機会を意図的に増やしました。語彙指導では、新出単語を発音練習だけで終わらせるのではなく、英語で説明し合うクイズ形式の活動を取り入れました。文法や構文についても、身近な話題を用いて繰り返し表現する活動を取り入れ、知識を実際のコミュニケーションで活用できることを目標としました。

さらに、帯活動として4コマ漫画の描写や「1分間スピーチ」を継続的に実施。1分間スピーチでは、身近なテーマや想像的なテーマについて英語で話し、聞き手には質問者やワードカウンターなどの役割を与えることで、全員が主体的に参加できるようにしました。



何をすればよいかの共通イメージや活動目的を明確にする

一方で、英語で話すことに不安を感じる生徒もいるため、「傾聴」「既習表現の活用」「他者へのリスクペクト」といった授業規律を共有し、安心して発言できる雰囲気づくりを大切にしました。レベル

に応じた難易度の調整や、フィードバックをする際の生徒の挑戦を支える指導を心掛けながら、よくある誤りを取り上げ、日本語で解説することで生徒が納得しながら英語を学べるようにしました。

学習活動としては、学年全体で「音読テスト」、「修学旅行先である沖縄についてのプレゼンテーション」、「教科書の中で最も印象に残ったレッスンを紹介する発表活動」を実施。発表活動では、教師によるモデル提示、選択肢の提供、評価基準の共有、十分な練習時間の確保等により、生徒が何をすればよいのか共通イメージをもたせたり、

【実践のポイント】

- ❖ ペア・グループ活動を中心に、英語でやり取りする機会を日常的に設定。
- ❖ 新出単語を自分の英語で説明する語彙活動の実施、既習語彙の使用を促進。
- ❖ 身近な話題を用いた文法活用の活動。
- ❖ 帯活動で多彩な活動を実施。例えば4コマ漫画の描写、「1分間スピーチ」。回を重ねるごとに円滑になり、発話語数が増加した。
- ❖ 生徒の挑戦を支える肯定的な学習環境の構築。
- ❖ モデル提示・評価基準の共有・十分な練習時間の確保等により、活動目標や共通イメージが描ける支援を提供。レベルに応じて問いの難易度を調整。
- ❖ 「英語を話すことへの抵抗感が減った」「友達の意見を聞くのが楽しかった」との声が多く寄せられ、積極的に英語を話す生徒の割合が上昇、学年全体で英語力が向上。

自信をもって取り組めるよう支援しました。英語を使うことへの心理的な抵抗感を減らし、主体的に発信する姿勢を育成することを念頭においていました。

日常的な1分間スピーチや授業後の振り返りについては点数化せず、教師がコメントを返す形で支援しました。一方で、学年全体で実施するプレゼンテーションや発表活動については、「発表内容」「発音・声の大きさ」「聴き手への意識」といった観点を設定し、評価を行うことにしました。生徒が評価基準を理解した上で活動に臨めるよう工夫することで、目標をもって学習に取り組める環境を整えました。



生徒の発話語数が増加

こうした取組により、生徒の様子が明らかに変わってきました。1分間スピーチでは、回数を重ねるにつれて活動への参加が円滑になり、多くの生徒で発話語数の増加が見られました。また、活動後のリーディングへの集中力も高まり、英語を使うことが学習への意欲向上につながっていました。生徒アンケートでは、「英語を話すことへの抵抗感が減った」「友達の意見を聞くのが楽しかった」といった肯定的な声が多く寄せられました。

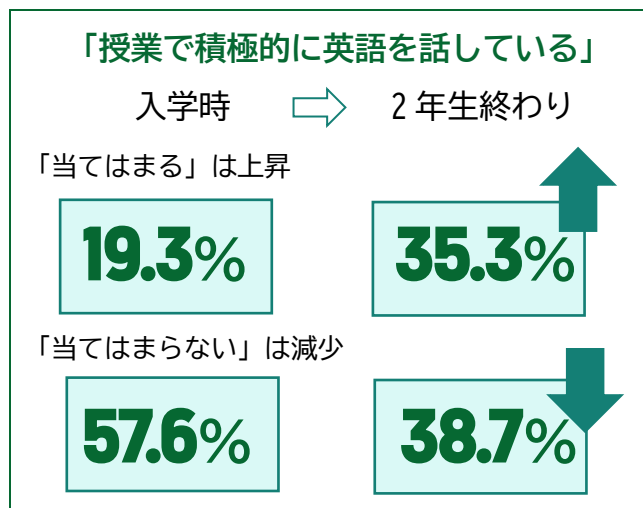
学力面でも成果が確認されています。この学年は入学時、英文法に苦手意識をもつ生徒が24.7%、英語を話すことが苦手な生徒が19.8%おり、学力テストの平均点も過去5年間で最も低い学年でした。しかし、継続的なアウトプット活動を中心とした指導により、2年次の英語学力テストでは例年並みの水準まで向上し、過去5年間で3番目に高い成績を収めました。

GTECの結果ではCEFR-J B1レベルの生徒が1年次の4.2%から2年次には12.2%へと増加し、A1以下の層は大きく減少しました。また、英検受験者も増加し、準2級から準1級まで2年次までに48%の生徒が受験するなど、英語学習への意欲向上が見られました。

加えて、意識調査において「授業で積極的に英語を話している」と回答した生徒の割合は、入学時の19.3%から2年次末には35.3%へ上昇しました。

反対に、消極的な回答は57.6%から38.7%へ減少しています。

こうした変化は、生徒が「正しく話すこと」だけでなく、「伝えること」を意識できるようになった結果と考えられます。継続的な成功体験を通して自信を獲得した生徒は、より積極的に英語を使おうとするようになり、その姿勢が英語外部試験への挑戦や学力向上にも結び付いたといえます。



発話の質を高める指導への発展

本実践は、学習指導要領にある考え方を基盤とし、アウトプットの機会を豊富に設定することで言語習得を促進することを意図したものです。最大の成果は、生徒の英語学習に対する前向きな態度が育まれた点にあります。今後は、これまで培ってきた発話量や積極性を基盤としながら、より豊かな表現ができるよう発話の質の向上を目指します。



継続的な成功体験を通して自信を獲得した生徒は、より積極的に英語を使おうとするようになり、その姿勢が学力向上にも結び付いたといえます。



BEST PRACTICE AWARD

福井県立藤島高等学校 三仙真也教諭

小林香織教諭



本質的な「やり取り」と思考力 向上のための英語授業改善（高校2年生）



教師の授業改革を主導し、
思考を促す発問を導入

本授業改善は、地方の普通科進学校において英語科教員が協働して進めたものです。従来の授業では、ペア活動や発表の機会は設けられていたものの、生徒同士のやり取りが形式的になりやすく、教材に対し深く考えたり、表現したりする場面が十分とは言えませんでした。授業の目的は「教科書の内容理解」に力点が置かれ、十分な表現活動を行ったり、思考を深めたりすることができていませんでした。

そこで、授業者の意識改革と授業の中心を「内容について考え、意見を伝え合う活動」へと転換しました。そのために、Can-do Statementsを全面改訂するとともに共通するワークシートも見直し、生徒の思考を促すために設定した問いを中心に据えました。授業では、教科書の内容について根拠を示しながら自分の考えを述べる活動を取り入れ、ディスカッションやディベートへと発展させていきます。特に、環境問題や科学技術、社会制度といった現代的なテーマを扱ったディベートを学年全体で実施した点が特徴です。生徒は教科書だけでなく複数の資料も活用しながら、自らの立場を整理し、英語で主張を構築していきました。



生徒の内省を促す授業改善

さらに、英語コミュニケーション、論理・表現の両科目の授業改善に取り組みました。英語コミュ

ニケーションでは言語活動と語彙学習、ライティングとを有機的に結び付け、生徒にとって学習が断片的にならないように工夫しました。Google Classroomを活用してエッセイの提出とフィードバックを行い、生徒一人ひとりの学習過程を継続的に記録しました。論理・表現ではマンダラートやマッピングなどの思考ツールを導入し、考えを整理した上で対話する機会を設定しました。

【実践のポイント】

- ❖ 思考を促す問いを軸とした授業改善とワークシート作成。
- ❖ Can-Do Statements を全面改訂。チェックリストと共に運用、生徒と教員の共通認識。
- ❖ 逆向き設計を導入し、到達目標を起点にしつつ、各教員の自由度を担保した弾力性と一貫性を両立。
- ❖ 教科書内容について根拠を示して自分の考えを述べる活動を導入。
- ❖ ディスカッションやディベートを授業に組み込み、学年全体で実施。ディベート後のエッセイでは自己の変容を可視化できるようワークシートを変更。
- ❖ 読解・語彙学習・ライティングと連動させ、学習の連続性を確保。
- ❖ 外部4技能模試、スピーキング課題、ライティング課題を活用した多面的評価を実施。
- ❖ 「正解を述べる」のではなく、「考えを深め続ける」ことに価値を見出す記述が見られ、生徒の学習観そのものが転換。

こうした取組により、生徒は相手の意見を踏まえながら自分の考えを見直し、英語を単なる知識ではなく、思考を深めるための手段として活用するようになりました。加えて本実践では、「論理的に考え、自分の考えを英語で表現する力」の育成を目標に掲げ、生徒の成長を多面的に評価しました。まず、外部4技能模試やスピーキング・ライティング課題を活用し、生徒の英語運用能力を客観的に把握しました。また、全面改訂した Can-Do Statements に基づく自己評価や授業アンケートを実施することで、生徒自身が学習の到達度や課題を振り返る機会を設けました。

加えて、結果だけではなく形成的評価も重視しました。ディベート後にエッセイを書かせ、Google Classroom 上で提出と添削を繰り返すことで、生徒がどのように考えを深め、表現を改善していくのかを生徒自身が継続的に把握できるようにしました。ALT によるフィードバックを継続的に行った結果、生徒は自らの弱点を具体的に理解し、次の学習に生かすことができるようになりました。



思考力と表現力の向上を示す成果

こうした取組の結果、生徒には大きな成長が見られました。外部4技能模試では、4技能（総合）、リーディング、リスニング、スピーキングで過去最高成績を記録し、ライティングでは全国2位という優れた成果を収めてました。さらに本校でこれまで課題であった「自分の考えを英語で構築し表現する力」が大きく向上したことが、客観的なデータによって示されました。

加えて、授業理解度に関する校内アンケートでも肯定的な回答が増加し、生徒自身が学びの充実感を得ていたことがうかがえます。さらに注目すべきなのは、生徒の思考の質的な変化です。以前は最終的な成果物中心の評価で、生徒の思考過程や

成長はつかみづらいという課題があり、また生徒は一般的な意見にとどまることが多かったのですが、複数の観点から課題を捉え、また建設的な意見表明ができるようになりました。

令和7年度 福井県学習状況調査

授業では、生徒の
間で話し合う活動を
よく行っていますか？

97.5%

考えを他の人に説明
したり文章に書いた
りしていますか？

96.5%

授業の内容はあなた
にとって興味をひき
ますか？

前年度比 8%アップ

90.7%

ディベートでは、相手の意見を踏まえて条件を付け加えたり、自分の主張を修正したりする場面が増え、やり取りの質の向上がみられます。エッセイにおいても、単純な賛否を述べるだけではなく、根拠や反論を取り入れた論理的な文章を書く生徒が増えました。

その結果、生徒は「正解を答えること」ではなく、さまざまな情報を組み合わせ「考えを深めること」に価値を見出す生徒が増え、学習観そのものに転換が生じています。英語力の向上に加え、自ら考え他者と対話しながら学ぶ姿勢が育まれたと実感しています。



持続可能な授業改善と評価へ

今後は、ディベート、思考ツール、ICT 活用を組み合わせた指導をさらに体系化し、学年間や教科間でも共有できる実践へと発展させたいと考えています。また、Can-Do Statements を活用した形成的評価を継続しながら、生徒の思考過程や成長をより分かりやすく可視化できる評価方法の確立を目指したいと考えています。

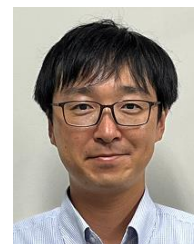


本実践は、4技能の向上という明示的な成果に加え、生徒自身が思考の深まりを可視化し、学習観の変容という内面的な成長を同時に実現した点に大きな意義があります。



BEST PRACTICE AWARD

福岡県立修猷館高等学校（福岡県立香住丘高等学校
（当時））山田慎太郎教諭



教科書を最大限活用した 4 技能統合型 の授業実践（高校3年生）



教科書を核とした言語活動 中心の授業づくり

高校3年生の「英語コミュニケーションⅢ」において、教科書を活用しながら生徒の総合的な英語力育成を目的とした実践を行いました。基本的に予習は行わず、授業内で教科書の英文を聞いたり読んだりしながら、教師と生徒、生徒同士が英語でやり取りする機会を数多く設けています。「情報や考えなどを的確に理解したり適切に表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力」の育成をねらいとしています。

【実践のポイント】

- ❖ 教科書を活用し、4技能を統合した言語活動中心の授業を実施。
- ❖ 教科書本文を活用した言語活動を通して、英語でのやり取りから内容を理解したり、意見を表現したり、伝え合ったりする。
- ❖ 単元の導入とまとめに単元テーマに関する問いを提示、単元を通して生徒は自分の成長を実感。
- ❖ リスニング・リーディング後に学習内容を深めるスピーキング活動を実施。
- ❖ 授業内容と宿題を連動させる。（授業で内容理解ができたリスニングのディクテーションや精読、ワークブックへの取り組み等）
- ❖ 定期考査に加え、音読・スピーキングテストやルーブリック評価を活用し、多面的な評価を実施。
- ❖ 主体的に考える授業、学力が向上する授業と生徒の大多数が回答。

1 単元は約4時間で構成され、初回の授業と単元の終わりに、単元のテーマに関する問いを示し、生徒がペアで意見交換を行いました。その際、教師がモデルを示すことで、求められる発話の量や質を具体的にイメージできるように支援しました。続いて、教科書を用いたリスニング活動では、解答確認を行う際、生徒との英語でのやり取りを通して概要把握を進めます。宿題としてワークブックのディクテーション課題で、授業で扱った内容を繰り返し聞いてリスニング力の向上を図っています。

2・3 時間目には、教科書本文を授業内で読み進めながら内容理解を深めました。英語で問い掛けながら要点を確認し、生徒が内容を整理できるよう工夫し、複雑な構文や重要な語句については日本語で効率的に指導し、理解の定着を図りました。授業後には精読やワークブック、関連する入試英文に取り組み、学習内容の定着を図っています。

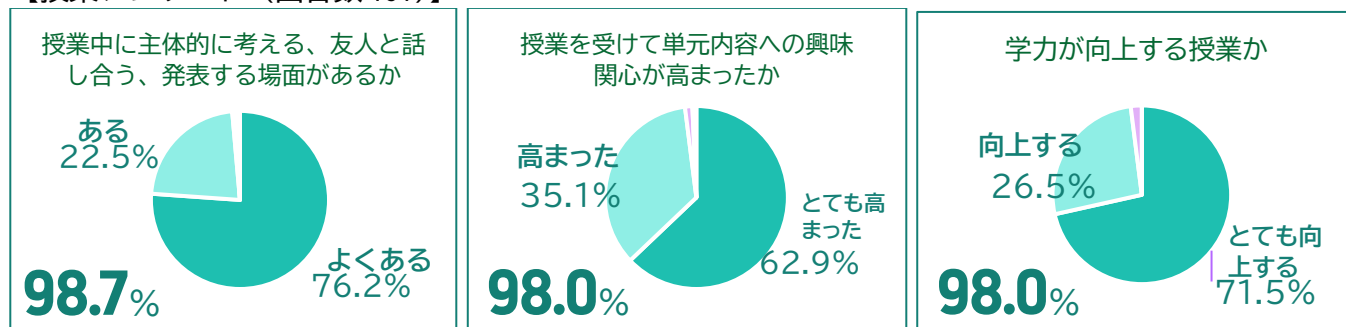
4 時間目はスピーキング活動が中心です。教科書本文に関する複数の問いについてペアで意見交換を行い、その後全体で共有します。教科書の情報をまとめて説明する問いや、内容への賛否を述べる問い、学んだことを身の回りや社会でどう生かすかを考える問いを設定し、教科書の内容や語彙・表現を活用して発話できるよう工夫しています。



単元末「振り返り」の工夫

単元の最後には、初回と同じ問いに再度取り組みます。このことで、生徒は学習前との違いを実感しながら、自身の成長を振り返ることができました。

【授業アンケート（回答数 151）】



単元の最後には、初回と同じ問いに再度取り組みます。このことで、生徒は学習前との違いを実感しながら、自身の成長を振り返ることができました。最後にはエッセイを書き、自分の考えを英語で表現する機会を設けました。こうした一連の活動を通して、教科書で学んだ知識を実際のコミュニケーションに生かして英語を活用する姿勢を育成しました。



教科書を活用した言語活動 が学習意欲を向上

評価は、定期考査、パフォーマンステスト、授業への取組状況、エッセイやワークシートの取組状況を組み合わせて実施しました。定期考査では語彙・文法などの知識や読解力を確認し、パフォーマンステストでは音読やスピーキングを通して、自分の考えを英語で伝える力をルーブリックに基づいて評価しました。

また、日々の学習への主体的な取組も評価対象とし、生徒の成長を多面的に把握することを目指しました。こうした実践の成果は、生徒アンケートに明確に表れています。「主体的に考えたり、友人と話し合ったり、発表したりする場面がある」と回答した生徒は 98.7%、「学力が向上する授業である」「単元内容への興味・関心が高まった」は 98.0%に達しました。

さらに、学力面でも成果が見られました。進研模試（ベネッセ・駿台模試）の平均点偏差値を過去 5

年間と比較すると、本実践を行った学年はすべての実施回で最も高い数値を示しました。教科書中心の言語活動を継続したことが、外部模試で求められる読解力や情報処理能力の向上にもつながったと考えられます。

また、英語 4 技能の総合的な伸長も確認されました。本実践を受けた 384 名の学年では、多くの生徒が英検 2 級に、29 名が準 1 級に合格。英検準 1 級は大学中級程度の英語力が求められる試験であり、高度な英語運用力を身に付けたことを示しています。

何より大きな成果は、生徒の学習姿勢の変化です。継続的な言語活動を通して、教科書で得た知識を活用しながら、自分の意見を表現できるようになり、英語をコミュニケーションの手段として主体的に活用する姿勢が育まれたといえます。その結果、英語学習に対するモチベーションが高まり、自律的に英語学習に取り組む生徒の育成につながったと考えています。



指導と評価のさらなる充実を 目指して

今後は、コミュニケーションを行う目的や場面、状況を多様に準備するとともに、各単元の言語活動の到達度を図るための評価をより明確に設定し、指導と評価の一体化をさらに進めていきます。また、AI 等の技術を活用し、エッセイへの個別フィードバックの充実も図りたいと考えています。



何より大きな成果は、学習姿勢の変化です。生徒は教科書で得た知識を活用しながら、自分の意見を表現できるようになり、英語をコミュニケーションの手段として主体的に活用する姿勢が育まれたといえます。



大阪府立富田林中学校高等学校 小田琴雪教諭

批判的思考力を用いた「提案型ディスカッション」(中学3年生)



英語を「考えや意見を伝える道具」として活用できるように

本校では探究活動に系統的に取り組み、中学1年生で基礎を学び、中学2年生ではフィールドワークで問いを深め、中学3年生では自ら設定した課題への解決策を提案できるようにめざしています。

本実践では、探究で培った批判的思考力を生かし、生徒が自由に意見を出し合い課題解決策を提案する「提案型ディスカッション」を実施しました。ナッジ理論の視点を取り入れ、行動変容を促す具体的なアイデアを英語で発信する力の育成をめざしました。

【実践のポイント】

- ❖ 中1時から質問を重ねる活動で、対話を深める基礎力、中2では相手の意見を受けて考えを広げる力を養ってきた。
- ❖ 分からない単語も英語で説明できるよう、日常的に英語で活動、身近な課題を題材に設定し、英語で伝えたい意欲を高める。
- ❖ 探究活動で培った批判的思考力を生かし、提案型討論に取り組んだ。
- ❖ 班活動とジグソー法を組み合わせ、多様な意見の交流を通して、考えが変容・深化したと自己評価する生徒が多く見られた。
- ❖ 英語が苦手な生徒にも配慮し、ファシリテーターやワークシートを活用。
- ❖ 英語をコミュニケーションのツールとして活用する意識が高まり、学習意欲の向上につながった。
- ❖ 学力上位層が増加し、語彙・文法、読解・表現の力も向上した。

生徒の課題提出率が100%ではないことに着目し、“I can suggest wonderful ideas to teachers!”というテーマと目標を設定しました。本時は中学3年生40人を対象に実施しています。日頃から教師も生徒も英語を中心に活動を行い、また自ら英語学習に取り組む生徒を増やすために、英語を「知識の詰め込み」ではなく「コミュニケーションのツール」であることを意識させてきました。本時のディスカッションに関しても、生徒の身近にある問題をテーマとして設定することで、「伝えたい(＝英語を使いたい)」という意欲を掻き立てられたと考えています。

本時では、各自でまずアイデアを書き出した後、5人班で話し合いを行い、グループとしての提案を決定します。その後、ジグソー法の形で全員が別の班に移動し、自分たちの考えたアイデアを他班に提案。移動先では互いに批判的思考力を働かせながら質問やコメントを行い、他者の意見を得ます。続いて元の班に戻り、得られたコメントや質問をもとに提案内容をさらに深めます。最後に班の代表者がクラス全体に向けて発表を行います。

本時のようなディスカッションを行うために、中学1年生時は疑問詞を使って質問をし続ける力、中学2年生時は“I like your idea, but…”等のフレーズを用いてアイデアを深める力を育んできました。また生徒自身がAll Englishで活動できるように、分からない単語があっても英語で説明できるように、ゲーム(Guessing Game)等を通して鍛えてきました。その結果、本時ではナッジ理論を参考にしながら、「課題提出率を上げるために、どんな工夫が効果的か」を英語で話し合い、意見し合うことができました。生徒からの提案(発表)では、reward/penalty system や friends' cooperationなどが挙げられました。



生徒間で助け合い学び合う ことが英語力向上に

英語に苦手意識のある生徒への支援として、各グループでファシリテーターを設けるとともに、思考の流れに沿ったワークシートを活用して意見を記録できるようにしました。教師も必要に応じて声掛けを行います。生徒間で助け合い学び合うことが英語力向上につながると考えています。実際に“What do you think, ○○?”や“Do you mean ~?”などのやりとりが見られ、苦手意識のある生徒も発言しやすい環境であったと思います。またワークシートにグループの意見や他の生徒が用いた単語を記録することで、他班に発表する際も話しやすくなったように見られました。

ライティングとパフォーマンステスト（ディスカッション）を通して以下の2点を評価しました。

1. 批判的思考を持ち、英語で自身の考えを表現できているか。
2. 他者の発表に対して、追質問やコメントをしたり、リアクションを取ったりできているか。

ライティングでは各々が持つ意見（難しければディスカッション時に発表したグループの意見）について、理由と詳細を英語で表現できているかを評価しています。また記録に残す評価ではないですが、意見に対する理由と詳細が批判的に考えられたものかを見て指導に活かしています。パフォーマンステストでは、予め評価基準を示した上で、ディスカッション時に必要な力を測っています。ディスカッションの結果、GOALとしていた提案（発表）をし、実際にそれらの提案を取り入れるには、不十分な点や実現が難しい部分も見られましたが、相互に問いを重ねながら実現に向けて考えを深めることができていました。そしてワークシート裏面のSelf-Evaluation Sheetでは、他者との対話を通して自身の考えが変容したり、深まったりしたとの記述が多く見られました。

実際に「英語をツールとして使う活動」を多く取り入れたことで、英語力全体が向上したと見られました。学力推移調査の結果（中学2年生第3回中学3年生第3回）は、【学習到達ゾーン（GTZ）S3～S1：24人→31人、B2以下：26人→14人】となりました。この1年間で成績上位層は増加し、英語を

苦手とする生徒も減らすことができました。また本時のようなコミュニケーションベースの授業では、入試に必要な力が身につかないという意見もありますが、言語活動を通して【語彙・文法：9.4→22.6、読解・表現：16.7→26.0】の項目も全国平均との差を広げることができました。実用英語技能検定においても、該当学年生徒の約92%が準2級合格レベル、うち約71%は準2級プラス合格レベル、全体の上位19%が2級合格レベル、3%は準1級合格レベルに到達しています。



より広い社会課題へ挑戦する 学びの実現

これらの結果から、英語を実際にツールとして使うことで、英語学習への意欲が高まるだけでなく言語知識も深めることができたと分かります。高校1年終了時には、全体の80%以上が英検2級合格レベルに到達することを目標としています。次年度は「基礎を大切にする」意識を持つとともに、「多読&多聴」に取り組むことで英語力全体の底上げを図りたいです。授業で行うディスカッションでは、身近な話題だけでなく、社会問題をテーマとしたものも扱い、本校のスクールミッションでもある「グローバルリーダー」（地球的視野に立ち、地域や国の事を考え行動し、国際社会に貢献できる人材）をめざします。



「4技能を意識した活動」
を継続的に取り入れたこと
で、英語力全体にも大きな
成果が表れました。



新潟県立高田高等学校（当時） 長谷川誠教諭

豊かな英語使用を引き出す 4 技能統合型授業デザイン（高校3年生）



4 技能育成と入試対応の 両立を目指して

現行の学習指導要領一期生を対象に、「指導と評価の一体化」を伴う 4 技能統合型の授業を 3 年生の 2 学期末まで継続しました。実践の結果、論理的思考力や英語発信力は伸長し、大学入試においても一定の成果を収めることができました。本稿では、3 年間にわたる実践の具体を報告します。

『ENRICH LEARNING ENGLISH COMMUNICATION III』（東京書籍）の Unit 8 “Is there anything money can't buy?” を用いた授業実践例を紹介します。導入では、「お金で買える／買えないもの」という問いについて話し合った後、スポンサーシップに関する問いについて自分の意見を Padlet に投稿し、他者の意見の説得力や論理性を検討しました。続いて、教科書を通してスポンサーシップの歴史や社会的意義について学んだ上で、読んで理解した内容の要点を自分の言葉で伝え、その内容に対する自身の意見を伝え合う Oral Summary を行いました。終盤では、「高田高校の命名権を有名企業に売ることの是非について、生徒会役員として学校長に生徒側の意見を述べる」という目的・場面・状況を設定し、Discussion and Consensus Building (DCB) を実施しました。生徒は、自分の意見を述べるだけでなく、他者の考えを尊重し、意見を比較したり、必要に応じて譲歩したり、複数の意見を融合したりしながら、グループとして説得力のある意見に合意することを目指しました。さらに、DCB での話し合いを踏まえて同じテーマについて英作文を書き、Peer Feedback や AI による添削を活用して改善しました。このような授業デザインによって、生徒は英語力を伸ばすだけでなく、他者と協働して建設的に議論する態度を身に付けなが

ら、実社会の課題解決に必要な思考力をも高めていきました。

本実践では、「話すこと」と「書くこと」について、3 年間でそれぞれ計 16 回のパフォーマンステストを行いました。例えば DCB パフォーマンステストでは、生徒は初見のテーマに対して、自分の意見とその理由を説明し、さらにグループで議論しながらより説得力のある意見への合意形成を目指しました。評価では、意見の妥当性や理由の明確さ、

【実践のポイント】

- ❖ 教科書を目的に応じて再構成し、「指導と評価の一体化」を実現。
- ❖ 答えが一つではないテーマを扱い、思考を深める対話を重視。
- ❖ Oral Summary や意見交換を通して、「読む」「聞く」「話す」を結び付ける。
- ❖ DCB(Discussion and Consensus Building)を通して、他者の意見を尊重しながら合意形成を目指す力を育成。
- ❖ 3 年間にわたる継続的なパフォーマンステストで英語発信力を育成。
- ❖ 初見の課題にも対応できるよう、実践的な思考力と応用力を段階的に育成。
- ❖ 多くの生徒が建設的、協働的に話し合い、英語で対話するスキルを向上させた。
- ❖ 社会課題について多角的に考え、建設的に議論する姿勢が身に付いた。
- ❖ 4 技能統合型の授業で、大学入試で求められる資質・能力の育成に一定の成果。

具体例の提示、合意形成につながる意見の提供などをルーブリックに基づいて評価しました。授業内 DCB でもパフォーマンステスト本番と同じルーブリックを用いて練習する機会を確保することで、指導と評価に明確なつながりを持たせました。

「読むこと」「聞くこと」についても、指導と評価の一体化の定義を満たせるように考查を設計し、3年間を通じて初見問題のみを出題しました。

こうした指導と評価の方針を担当者間で共有し、3年間を通して全クラスで一貫して実践することで、大学入試にも対応し得る資質・能力の育成を目指しました。



英語力向上と進路実現

実践を通じて、多くの生徒が、他者の意見を取り入れながら建設的に対話するスキルを身に付けました。振り返りには、「英語で本当に“話し合う”ことができた」という声が寄せられました。また、「いつも英語の授業は、世の中の課題に『?』を投げかけ、思考を深める学びの場を提供してくれた」という声もあり、社会課題について考える活動を通して、多様な考え方を受け入れながら建設的に議論する姿勢も育まれました。

当該学年は、通常授業の中で入試問題演習を行うことなく、4 技能 5 領域の育成を重視した学びを 3 年間継続しました。入学当初は、全国模試の結果が振るわない学年でしたが、多様な問いに対して自分の考えを持ち、論理的に発信する力の育成を継続した結果、大学入試後には、「授業で扱ったテーマと同じテーマが入試の英作文に出題された

(京都大学、東北大学)」「授業の要約練習のお陰で要約問題が新しく出題されてもやりやすかった(金沢大学、弘前大学)」という声が直接私に寄せられました。このことから、本実践が、初見の問いに対して考えを論理的に表現するという、大学入試で求められる資質・能力の育成に寄与した可能性を感じています。また、当該学年の国公立大学合格者数は、共通テスト開始以降で最高水準になりました。本実践との直接的な因果関係を示すものではありませんが、4 技能 5 領域の育成を重視した授業を 3 年間継続しながら、高い進路実績も両立できたことは、一つの成果であると考えています。

私は英語教育、特に DCB を通して、「あなたと話して良かった」と思ってもらえるコミュニケーターを育てたいと考えています。多様な価値観を持つ人々と共に生きるこれからの社会において、対話を通してよりよい答えを共に創り出す力は、子どもたちの生涯にわたる進路を支える大切な力になると考えています。こうした建設的な課題解決力を育むことも、英語教育が担う重要な役割の一つではないでしょうか。



学びの効果をより確かに検証するために

十分な定量データを蓄積できなかった点が課題として残りました。今後は、質問紙調査やパフォーマンス評価の分析を充実させ、成果をより客観的に検証したいと考えています。また、「人を育てる英語教育」をさらに発展させ、その成果を広く発信していきたいと思っています。



今回の DCB パフォーマンステストでは 5 人全員の意見が suggestion に含まれる形にできたため、とても平和的でみなが楽しく参加できたと思う。これからも意見がぶつかってしまった際には多くの人の意見を融合させ、より良いものを創っていききたいです(生徒)。



新潟県立高田商業高等学校 長谷川誠教諭

英語使用の自信を育む発問と足場架けの工夫を伴う授業デザイン（高校2年生）



発問と足場架けを工夫した授業づくり

発問や足場架けを工夫することで、生徒が安心して英語を使用できる場面を設定し、4技能をバランスよく育成することを目的として行なった取り組みです。令和7年度に2学年3クラスを対象として実施し、単元目標から逆算して授業を設計するバックワードデザインの考え方を取り入れていました。単元のゴールを事前に示し、その達成につながる発問や支援を段階的に配置することで、生徒が見通しを持ちながら学習できるように配慮しています。

『BIG DIPPER English Communication II』（数研出版）の食品保存の知恵を扱う単元では、天日干しや世界の食糧保存の知恵、日本の発酵食品の魅力などが扱われています。授業では、単元内容とこの単元のターゲットグラマー「仮定法」を踏まえ、「現代社会において食糧保存の知恵はなぜ必要なのか」「もし縄文人に二つの食糧保存の知恵を教えることができるとしたら何を教えるか」といった問いを設定し、「話すこと」と「書くこと」の目標につなげています。

授業の導入では、花を贈られた際にドライフラワーと生花のどちらを選ぶかという身近な話題からスモールトークを行いました。その後、教科書本文の内容に関連した問いを用いて対話を重ね、生徒が本文内容について自分の考えを英語で表現する機会を設けました。そして、単元のまとめとして、単元目標として設定した問いについて話したり書いたりする活動に取り組みました。

また、本実践では足場かけも重視しています。「話すこと」の活動では、guided dialogueの手法を取

り入れ、conversation frame を提示するとともに、使用が想定される語句や表現を示し、さらに、thinking time を設定することで、英語が苦手な生徒でも安心して英語を使えるようにします。一方で、相手の発言に対してその場で質問を考え、やり取りを継続する指導も実施しました。このように、安心して取り組める支援と、自ら考えて応答する場面の両方を設定することで、生徒が英語を使いながら思考力と英語使用スキルを段階的に高められる授業デザインとしました。

【実践のポイント】

- ❖ 単元目標を事前に提示し、発問や足場架けを設計。
- ❖ conversation frame や使用語句の提示、thinking time など、英語が苦手な生徒でも参加しやすい環境を提供。
- ❖ Small Talk を取り入れ、2学期以降は2分間程度ほぼ英語だけで会話を継続できるようになった。
- ❖ 話す・書く・読む・聞くの全てにおいて、暗記ではなく英語の運用力を測るための初見問題による評価を実施。
- ❖ 4技能すべてにおいて自己効力感（英語ができるという自信）が向上。
- ❖ パフォーマンステストで88.5%の生徒が最高評価（A）を獲得（自分の意見と理由を英語で表現できる）。
- ❖ 英作文でも大半の生徒が授業で求められるレベルの英語使用スキルを身に付けた。
- ❖ 英語嫌いの生徒は3分の1以下に減少。英語が好きな生徒は1.5倍以上に増加した。

「4 技能をバランスよく育成する」ことを目的としているため、暗記による再生ではなく、英語を運用する力を測る評価としました。そのため、「話すこと」「書くこと」「読むこと」「聞くこと」のいずれについても、初見の課題や問題を活用した評価を実施しました。



自己効力感における変容と英語嫌いの減少

本実践は、「English rich な授業設計を通じて、英語使用の自信を育むこと」を目的にしています。そのため、「授業で求められる英語を聞く／読む／話す／書くことができる」という問いを用い、4 技能それぞれの自己効力感の変容を検証しました。意識調査を 4 月と 3 月に 2 回実施し、その結果を t 検定にかけ、効果量を算出した結果、以下のようになりました (n = 108)。

	p 値	効果量
聞くこと	0.001	0.36
読むこと	0.050	0.24
話すこと	0.001	0.67
書くこと	0.001	0.71

英語使用の自信育成の面において顕著な成果が得られました。また、「4 技能の自信の向上」の観点からも統計的に有意な改善が確認され、本実践が 4 技能全ての自信育成につながった可能性が示唆されました。とりわけ話すことと書くことに大きな改善が確認されました。こうした変化から、生徒

が「英語を使えるかもしれない」という実感を積み重ねていったことがうかがえます。

年度当初、生徒同士の Small Talk では 30 秒程度でも沈黙が生じ、日本語に頼る場面が見られました。しかし、発問と足場架けを継続的に行った結果、2 学期以降には 2 分間程度のやり取りをほぼ英語だけで継続できるようになりました。

評価結果からも成果が確認できました。パフォーマンステストでは 8 割以上の生徒が「基準を十分に満たす」A 評価を満たし、英作文でも大半の生徒が自分の考えを理由とともに表現できるようになりました。また、アンケートでは英語嫌いの生徒が 1/3 以下に減少し、英語を好きと感じる生徒が大幅に増加しました。「英語への苦手意識がなくなった」「もっと話せるようになりたい」といった声のほか、「パフォーマンステストや英作文を通して、英語の楽しさに気づいた」という、自分自身の変容や成長を喜ぶ声が多数振り返りに寄せられました。



学校外でも通用する英語力の育成へ

本実践は、新任校赴任 1 年目の取組で、生徒の様子を丁寧に観察しながら授業を設計したことで一定の成果が得られました。一方で、今回の評価基準は「授業で求められる英語使用スキル」が中心であったため、今後は英検や入試などの外部基準にも対応できる英語使用スキルの育成が課題として挙げられます。3 年間を通した指導で、学校外でも通用する英語使用スキルの育成を目指します。



英語は苦手で嫌いでしたが、今年度の授業で英語の苦手意識がなくなり、初めて英語学習を楽しむことができました。テストでも高得点をとれるようになり、自分の成長を実感できました。(生徒)



茨城県立水戸第一高等学校 花沢典行教諭

やり取り型類似タスクの構造化と反復による発信力の向上（高校1年生）



「話す・書く」を繰り返し
行う帯活動を1年間継続

本実践は、高校1年生約240名を対象に、「論理・表現Ⅰ」で1年間継続して行われた発信力育成の取組です。実践の中核となるのは、「構造化した類似タスクの反復」です。ミニディベート、ディスカッション、ライティングを同一トピックで段階的に行い、話すことと書くことを結び付けながら、生徒の発信力を高めることを目指しました。

第1時では、ミニディベートを実施しました。生徒は理由や具体例を示しながら意見を述べ、相手の主張に質問や反論を行いました。活動後には、「言いたかったが言えなかったこと」や「参考にした友人の表現」を振り返り、自身の課題や学びを整理しました。

第2時には、同じテーマで4人グループによるディスカッションを実施し、その後ライティングへとつなげました。類似したタスクを繰り返すことで、生徒はミニディベートで得た表現や他者の意見を活用しながら、より深く考え、発信する機会を積み重ねていきました。

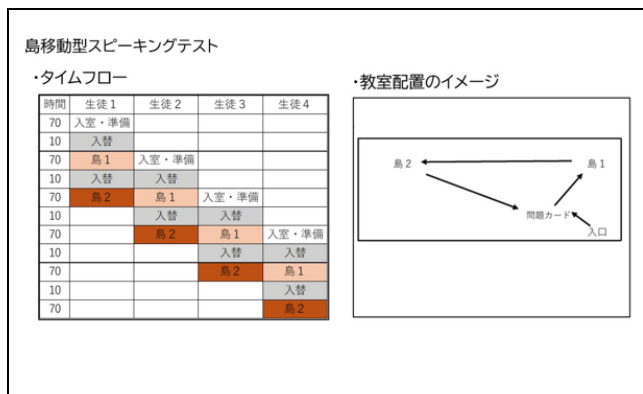
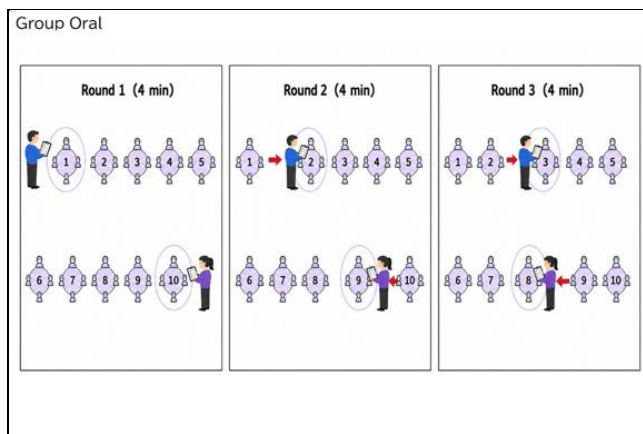
教師とALTは、活動中は英語で積極的に生徒とやり取りしながら、生徒の発言をリキャストしたり、再質問や発展的な問い掛けを行ったりして、思考を深める支援を行いました。また、議論を活性化させる効果的な質問や発言を全体で共有する中間指導を取り入れ、生徒がより質の高いやり取りを行えるよう支援しました。こうした働きかけにより、生徒が安心して発言し、考えを広げられる学習環境を形成しました。

評価面では、日常の帯活動と連動した Group Oral

と島移動型スピーキングテストを実施しました。Group Oral では、4人による4分間のディスカッションを10ラウンド行い、ALTを含む複数の教員が評価し、島移動型スピーキングテストでは、生徒が教員の机を移動しながら絵の描写や意見陳述に取り組みました。さらにテスト後には振り返りを行い、成果や課題、改善策を具体的に記述させることで学習改善につなげました。こうした指導と評価の一体化を図りながら、English Richな授業環境の中で発信力向上を目指しました。

【実践のポイント】

- ❖ ミニディベートとディスカッションを交互に行い、発信力向上。
- ❖ 同一トピックで話す活動と書く活動を結び付けて実践。
- ❖ 構造化した類似タスクの反復により、表現の定着を促した。
- ❖ 振り返り活動を通して、課題や友人の表現への気付きを促す。
- ❖ 教師はリキャストや発展的な発問で、生徒の思考の深化を支援。
- ❖ Group Oral と島移動型スピーキングテストで継続的に評価を実施。
- ❖ 生徒の振り返りから、発話量重視から対話の質重視への成長が見られた。
- ❖ 課題認識が語彙不足や表現不足から、論理性や応答力の向上へと発展していった。
- ❖ GTEC Advanced の Writing と Speaking における平均スコアや CEFR-J 分布が、本校2年生の生徒の例年の水準を上回る結果に。



自分の発話だけでなく議論全体を意識するようになりました。こうした変化から、生徒の関心が「英語を話せるか」から「相手とよりよく伝え合えるか」へと発展したことが分かりました。

定量的な成果も明確に確認できました。GTEC Advancedでは、Writing 平均スコアが英語学習歴の長い本校2学年の例年の水準を上回り、Speakingでも同等以上の結果となりました。また、CEFR 分布を見ると、B1 以上の生徒数の割合は Writing で約 13%、Speaking で約 10%、例年の本校 2 年生の割合よりも多くなっていました。さらに、Speaking・Writing の両方で下位層が減少し、中位層以上の割合が増加していたことから、発信力の底上げが実現できました。

以上のように、生徒は英語を話すことへの不安を徐々に克服し、自信をもって意見を伝えられるようになりました。また、発話量の増加だけでなく、相手の考えを受け止めながら協働的に議論を進める力も育成することができました。類似タスクの構造化と反復、そして指導と評価の一体化が、生徒の発信力を量的・質的の両面から向上させたのではないかと思います。



確認された発信力の向上

Group Oral の振り返りを比較すると、生徒の成長が見られました。7 月の段階では、「意見を言うことができた」「理由を付けて話せた」「沈黙せずに発言できた」など、発話そのものへの達成感を記述する生徒が多く見られました。一方で課題としては、「語彙が足りない」「英語にすぐ変換できない」といった表現面への不安が中心でした。

しかし 2 月になると、「反論を意識して発言できた」「相手の意見を受けて質問できた」「議論を広げることができた」など、やり取りの質に関する記述が増加しました。課題についても、語彙不足より論理性や応答力に焦点を当てる生徒が増え、



やり取りの質をさらに高めるために

今後は、意見交換を中心とした活動から、合意形成や交渉を伴う活動へと発展させていきたいです。また、中間指導や振り返りの内容をさらに充実させ、言語面・内容面双方の向上を図り、パフォーマンステストの評価基準を改善することで、学習活動への波及効果を一層強化していきたいと考えています。



有機的なつながりのある活動を繰り返し、それを定期的に評価することが発信力の向上につながりました。



横浜市立横浜サイエンスフロンティア高等学校

今西由美子教諭

主体的にやり取り・発信する高校英語 授業（高校1年生）



生徒の声を起点にした
主体的な発信とやり取りの育成

入学直後には、「英語が難しくなった」「間違えるのが不安で話せない」と感じる生徒が少なくありませんでした。中学校から高等学校への重要な移行期にある高校1年次生に対し、英語学習への意欲を維持しつつ主体的に発信し、相手とやり取りする力を育成することが課題でした。

そこで本実践では、Exploratory Action Researchを通して生徒の声を丁寧に聴きながら、ボランティア生徒と共同研究者として協働し、授業改善を進めました。まず1学期にはWeekly Reflection Sheetを導入し、教員が生徒一人ひとりの声に丁寧に耳を傾け、対話を重ねることで、生徒の不安や興味・関心を把握するとともに、信頼関係の構築に継続的に取り組みました。また、Weekly Reflection Sheetでは、少しずつでも英語で書けるところは英語で表現するよう励ましました。その結果、1年後にはほぼ全員が、考えや思いを英語で書きながら振り返りを行うようになりました。

振り返りの分析から、生徒の関心に基づく活動が学習意欲を高めることが分かりました。そこで夏季休業中には、「英語の学習意欲を高めるには」を全体で共有する大きなテーマとし、生徒一人ひとりが興味・関心に基づいてテーマを設定し調査・研究を行う「Summer Self-Directed Research Project」を実施しました。生徒は探究活動で培ったリサーチスキルを活用し、調査結果を英語で発表しながら質疑応答にも挑戦しました。

一方で、生徒との対話から協働的な活動への期待も見えてきました。そのため、冬季には共同研究者の生徒と活動内容や評価方法を設計し、2年次の研修旅行先であるマレーシアについて、生徒がグ

【実践のポイント】

- ❖ Exploratory Action Researchを行い、共同研究者であるボランティア生徒とプロジェクトや評価を共同デザインすることで、主体的に学ぶ姿勢への理解が深まった。
- ❖ 「生徒の声を大切にする」とは何かを、教員自身が問い直し、教員も継続的に省察する。
- ❖ Weekly reflection sheetを通して、生徒と英語で対話を重ねる。
- ❖ 生徒の興味・関心を生かした探究学習で、英語学習への意欲が向上。
- ❖ 姉妹校交流や観光局との連携など、authenticな場を創出。
- ❖ 文法を文脈の中で学び、creative writingへ活用。
- ❖ 英語への心理的ハードルが下がり、学習意欲と発信意欲が向上。
- ❖ ディベートやインタビュー活動で積極的に発言する生徒が増加。
- ❖ 授業評価では「主体的、積極的に授業に参加」に93%、「生徒理解が丁寧」に97%が肯定的に回答。
- ❖ 「英語が難しい」と感じていた生徒が、「もっと英語で発信したい」と考えるようになり学習姿勢に大きな変容。

グループごとに調査内容や方法を自由に設計するプロジェクトを実施。英語によるポスター作成や発表を通して、協力しながら学びを深める機会を設けました。また、姉妹校生徒との交流では、実際に英語を使う必然性のある場面が生まれ、自然なコミュニケーションが活発に行われました。

さらに、文法学習のあり方も見直しました。従来の知識の定着を中心とした学習に加え、物語の中で文法がどのような効果をもたらすのかを考えたり、学んだ文法を活用して創作活動を行いました。こうした取り組みを通して、生徒が英語を単なる知識として学ぶだけでなく、文法を「文脈の中で効果的に表現するための知識」として捉え、活用しながら身に付ける機会を設けました。



継続的な振り返りと対話が育む主体的な発信思考と英語力

本実践では、「主体的に発信・やり取りする力」を多面的に評価することを重視しました。形成的評価では、Weekly Reflection Sheet への記述と教員からのフィードバックを継続的に行い、生徒の意欲や変容を把握。また、エッセイライティングでは Peer Correction を取り入れ、書き直しのプロセスを通して表現力を高める指導を行いました。

総括的評価では、夏季プロジェクトのプレゼンテーション、冬季プロジェクトのポスター発表、AET とのインタビューテスト、ディベートなどを実施。評価に当たっては、相手の発言を受けて応答する力、内容の一貫性、語彙や文法の適切な使用、協働的な対話の姿勢などを観点として設定しました。さらに自己評価や相互評価も取り入れ、生徒自身が成長を振り返る機会を設けました。

こうした評価と指導を一体的に行った結果、生徒には大きな変化が見られました。まず、英語で意見や感想を伝えることへの心理的な抵抗感が軽減されました。入学当初は発言をためらっていた生徒も、継続的な振り返りと対話を通して自信を高め、自ら発信する姿が増えていきました。

また、夏季プロジェクトでは自分の興味に基づいて英語を活用する経験が学習意欲の向上につながりました。生徒と共同設計した冬季プロジェクトでは、「仲間と協力しながら取り組めて楽しかった」という声が多く寄せられ、協働的な学びが意欲を高めることが確認されました。

加えて、生徒 7 名は学会で英語ポスター発表を行い、研究者や大学生との質疑応答に挑戦。本物のコミュニケーション経験は達成感をもたらし、「自分も英語で発表してみたい」という声が広がり、学習への前向きな雰囲気が生まれました。

文法学習にも変化が見られました。物語を読んだり創作する活動を通して、文法を単なる知識ではなく「伝えるための道具」として捉える生徒の姿も見られました。「物語を書くために文法を復習した」「英語で話し合いながら書くのが楽しかった」といった振り返りがありました。

授業評価では、1 学期に「話し合いや発表など他者と学び合う機会がある」が 96.5%、「生徒の発言や質問を丁寧に理解しようとしている」が 98.2% の肯定的回答を得ていましたが、2 学期にはそれぞれ 99.1%、97.4% と、高い評価を維持できました。また、「主体的・積極的に授業に参加している」についても、1 学期の 92% から 2 学期には 93% へと向上しており、生徒の主体的な学習態度の定着がうかがえます。また AET とのインタビューテストやディベートでも積極的な姿が見られ、「もっと英語で話したい」「また挑戦したい」という声が多くありました。その結果、入学時には英語への不安を抱えていた生徒にも、1 年後には英語を使っの発信に楽しさや価値を見出し、自信を持って学びに向かう姿が見られるようになりました。



英語を使う必然性のある学びのさらなる充実

今後は、1 年次に育成した主体的に発信・やり取りする力を、2 年次のマレーシア研修や英語ポスター発表へと発展させていきます。生徒が自信を持って英語で考え、English rich な学びの質をさらに高め、伝えられる力を育成していきたいと考えています。



入学時には英語への不安を抱えていた生徒にも、1 年後には自信を持って学びに向かう姿が見られるようになりました。



鳥取県立鳥取西高等学校 松田裕史指導教諭

発問にこだわり「深い学び」を実現する 高校英語の授業デザイン

(高校 1-3 年生)



発問を軸にした「深い学び」 の授業デザイン

本実践は、松下佳代氏が提唱するディープ・アクティブラーニングを基盤とし、「深い学習」と「深い理解」を英語の言語活動に取り入れた授業モデルを、英語コミュニケーションⅠ・Ⅱ・Ⅲの3年間を通して実践した取組です。生徒の英語力向上だけでなく、世界観や価値観、視点の変容や更新を目指し、真正の学びの実現に挑戦しました。

実践では、「コンフリクト→内化→外化→リフレクション」という学習モデルをもとに、「スキーマの活性と問いの提示→インプット→インテイク→アウトプット→リフレクション」の単元モデルを構築しました。単元の導入では、ペア・インタラクションや Teacher Talk を通して、生徒自身と関わりの深い問いを提示し、学習へのエンゲージメントを高めました。その後、単元を貫く問いを提示し、学習のゴールを明確にしています。

リスニングやリーディングによるインプットの後は、推論発問や評価発問を活用したスピーキングやライティングを繰り返し行いました。推論発問では Why や How を起点として本文に直接書かれていない内容を考えさせ、評価発問では「既知と未知のズレ」「意見の対立」「葛藤」「否定」「意見・好み・情報のギャップ」を手掛かりに、生徒が表現したくなる問いを設定しました。こうした発問を通して、生徒同士の豊富なやり取りや発表する必然性を生み出しています。

また、教員は生徒の発言を他の生徒につなぎ、質問や意見を引き出しながら思考を深める役割を担

いました。学習の後半で実施した3人組ディスカッションやライティングなどの言語活動では、活動の形式よりも、目的・場面・状況を重視した課題設定を行い、単元テーマと学校生活や実体験を結び付けることで、生徒が言語活動を自分ごととして捉えられるよう工夫しました。さらに、リフレクションを通して「思考・判断・表現」における変容を振り返り、深い学びへとつなげています。

【実践のポイント】

- ❖ 「深い学習」と「深い理解」を軸に、英語コミュニケーションⅠ・Ⅱ・Ⅲで3年間の授業モデルを構築。
- ❖ 「コンフリクト→内化→外化→リフレクション」を基盤に、単元を貫く問いを中心とした学習を展開した。
- ❖ 推論発問や評価発問を活用し、生徒が表現したくなる状況で豊富なやり取りを促進。
- ❖ 3人組ディスカッション等多彩な活動を通して、多面的な思考を育成した。
- ❖ 単元テーマと学校生活や実体験を結び付け、言語活動の自分ごと化と深い学びを実現。
- ❖ 高校3年のあるレッスンでは「侘び寂び」を環境保護や社会全体の利益から捉えるなど、生徒の価値観や視点の変容が見られた。
- ❖ GTEC4 技能 Total は 923.6 点から 1030.3 点へ 106.7 点伸長し、全国的にも稀な成果。
- ❖ 授業アンケートでは毎回約 80%が「興味・関心が高まった」「新たな視点を獲得した」と回答。



多面的な評価と生徒の成長の可視化

評価は、形成的評価と総括的評価を組み合わせ実施されました。形成的評価では、単元のゴールとなる言語活動の後に振り返りを行い、学習状況を確認しました。3人組ディスカッションや同サイド異アーギュメントスピーチでは、Google フォームを用いて「Read & Look Up で英語を話すことができた」「OREO の流れで主張や反論ができた」という項目について4段階で自己評価を行いました。また、生徒同士で良かった点や改善点を共有し、自由記述欄には学んだことや気付いたことを記入させることで、内容面・技能面の成長や価値観の変化を把握しました。

総括的評価としては、スピーキングのパフォーマンステストを年2回実施しました。内容は教科書の単元末に扱った言語活動に類似したものとし、テスト後にはその場でフィードバックを行いました。また、エッセーライティングは定期考査や校内実力テストで実施し、「主張」と「正確さ」の2観点によるルーブリックで評価しました。加えて、客観的な指標として GTEC を活用し、4技能の伸長を継続的に確認しました。授業アンケートでは、興味・関心や新たな視点の獲得に関する項目を設け、学びの深まりを把握しています。

成果としては、英語で扱うテーマの広がりや学びの質的な向上が見られました。1年生では日常的话题を中心に扱っていましたが、2・3年生になると社会的なテーマについても考えを述べられるようになりました。3年次（英CⅢ）の「Kintsugi: The Art of Embracing the Imperfect」では、生徒から「侘び寂びを環境保護の観点から考えた」「他者の意見を通して新たな視点を得た」といった振り返りが見られ、英語による深い学びを通して考えを広げている様子がうかがえました。

技能面でも成果が表れています。3年次（英CⅢ）の振り返りでは、97.1%の生徒が「Read & Look Up で話すことができた」、100%の生徒が「主張の立論を理由を含めて行うことができた」と回答しています。1年次（英CⅠ）にはそれぞれ約30%、約87%であったことから、3年間を通した大きな成長

がうかがえます。

GTEC でも高い伸長が見られました。授業者が2年間担当した23名の生徒では、4技能総合スコアが923.6点から1030.3点へと106.7点向上し、どの技能においても得点が伸びました。また、授業者が2年以上担当した生徒の中から、英検1級合格者1名、準1級合格者3名、2級合格者10名を輩出しています。さらに、授業アンケートでは毎回約8割の生徒が「興味・関心が高まった」「新たな視点を獲得した」と回答しており、英語力の向上とともに視野の広がりも確認されました。

GTEC4 技能総合スコア

923.6 ▶ 1030.3

1年間で106.7点向上



価値観の変容を促す学びの深化に向けて

今後も、英語運用能力の向上だけでなく、生徒の価値観や世界観の変容を促す授業を追究していきます。そのためには、伝える必然性や動機を伴う言語活動を重視し、「思考・判断」に関わる学びや発見を生み出していくことが重要です。また、既存のスピーキングやライティングのルーブリックを見直し、「深い学び」をより適切に捉える評価方法についても研究を進めていく予定です。



「英語を使って答えが一つに定まらない課題を解決する活動」を継続的に取り入れたことで、英語力全体にも大きな成果が表れました。



佐賀県立佐賀東高等学校（当時） 石橋 俊教諭

CLIL と SDGs 活動を通した英語力と社会性の向上（高校3年生）



学ぶ意義と社会で働く意義の連動

英語力と社会性の双方を育成することを目的として、CLIL の考え方と SDGs を組み合わせて授業を行いました。学習意欲が低く、英語への苦手意識のある生徒が多く、授業への集中が続かず、学習に前向きになれないケースも少なくありませんでした。そこで英語を単なる教科として学ぶのではな

く「社会課題を考え、解決策を発信するための手段」として活用する授業を構想しました。

授業では、まず年間を通して、単元毎に「Big Task」（社会問題に関する実践かつ発表と議論）を設定しました。テーマは SDGs に関わる社会課題で、生徒が調査や議論を行い、最終的に英語で発表することを目標としました。そのために、各時間の活動を Big Task につながる段階的な学習として位置付けました。

具体的には、Picture Description や Story Guessing によってスキーマを活性化させた後、Listening や Reading で様々なタスクを通して内容理解や自己の経験と結びつけました。また、Retelling や 3 分ライティング、Trio Discussion などの活動を取り入れ、自分の考えを英語で表現する機会を繰り返し設けました。さらに、Pyramid Discussion ではペアからグループへと対話の規模を広げ、他者の意見を取り入れながら考えを深めるとともに、発話量を段階的に増やしました。

また、SDGs の「貧困」や「共生社会」といったテーマについて ICT を活用して調査を行い、問題の原因や解決策を英語で考察させました。これは英語を「学ぶ対象」ではなく「内容を運ぶ手段」として位置づける意味があります。加えて、子ども食堂や地域イベントなど実社会での活動にも参加し、自分たちの提案が現実社会でどのように生かされるかを体験しました。こうした取組により、生徒は英語を使って社会と関わる意義を実感しながら学習を進めることができました。

【実践のポイント】

- ❖ CLIL と SDGs を組み合わせ、「英語を使って社会課題を解決する」授業を展開。
- ❖ Big Task を設定し、英語で発表・議論する授業を年間を通して設計した。
- ❖ 多様な活動を通して、論理的思考と発話量を段階的に高めた。
- ❖ 地域イベントと連携し、実社会体験を英語のプレゼンテーションへつなげ、自分の考えを英語で発信する力が向上した。
- ❖ 「英語が苦ではなくなった」「自分の意見を伝えるのが楽しい」と感じる生徒増加。
- ❖ 授業中の離席や問題行動が減少し、落ち着いた学習環境が形成された。
- ❖ 模試偏差値が 42.1 から 50.1 へ向上し、その後も 50 台を維持。（50 超は開校以来初）
- ❖ 英検合格者数や国公立大学合格者数が大幅増加。
- ❖ 社会課題への関心が高まり、ボランティア活動や関連分野への進学につながる生徒も現れた。



英語を使って社会と関わり、 自ら行動する力の向上

言語面については、Retelling、英作文、スピーキング活動を対象に、「正確さ」「流暢さ」「内容の一貫性」「語彙の適切性」の4観点で評価しました。また、定期的実施した3分ライティングには即時フィードバックを行い、継続的な成長を支援しました。

また、SDGsに関する発表やディスカッションでは、「課題理解」「論理構成」「根拠の妥当性」「説得力」を評価の観点としました。録音や録画を活用し、生徒自身がパフォーマンスを見直す機会を設けたことで、改善点を具体的に把握しやすくなりました。

一方で、評価には、英語力だけでなく社会課題に向き合う姿勢や協働する力も含めました。グループ活動では、「参加度」「他者尊重」「役割遂行」「課題解決への貢献」の観点からルーブリック評価を行いました。さらに、活動後にはリフレクションシートを活用し、「自分は何を学んだか」「仲間から何を学んだか」を振り返らせました。加えて、自己評価と相互評価も取り入れることで、多面的に自らの成長を捉えられるようにしました。

こうした取組の結果、生徒には学力面・行動面・意識面の三つの側面で大きな変化が見られました。学力面では、進研模試の偏差値が高校1年時の42.1から翌年には50.1へ上昇し、その後も50台を維持しました。長文読解や記述問題に取り組む生徒が増え、以前は空欄の多かった答案にも自分の考えを書く姿が見られるようになりました。

進研模試偏差値

42.1 ▶ **50.1**
1年7月 2年7月

行動面にも顕著な成果が表れました。模試当日の出席率が向上し、学習に対する姿勢も大きく改善しました。「休まない」「寝ない」「最後まで取り組む」といった当たり前の行動が定着し、授業中の離席や問題行動も大幅に減少。休み時間に自主的に学習する生徒も増加しました。

さらに、意識面では生徒のメタ認知の向上が顕著にみられました。「授業のタスクと似た問題がでた」「自分の意見を書けるのがうれしい」といった声があり、学習と評価の接続が実感されました。また、「スピード不足」「綴りミス」などの自己課題を具体的に認識している点も重要です。

「英語が苦ではなくなった」「自分の意見を伝えることが楽しい」「社会問題に関心を持つようになった」といった学習態度の質的転換に関する声も多く聞かれるようになりました。英語を通じて社会とつながる経験が、生徒の自己肯定感や学習意欲を高めたと考えられます。

外部試験の成果としては、英検合格者数は準2級が5名から25名へ、2級が2名から15名へ増加しました。国公立大学合格者数も例年の2名から17名へと飛躍的に増加しました。これは言語能力だけでなく、思考力・表現力が評価された結果です。また、社会課題への関心から進路を決定する生徒や、ボランティア活動を継続する生徒も現れました。英語を学ぶだけでなく、英語を使って社会と関わり、自ら行動する力を身に付けることができたのです。



社会とつながる学びの さらなる発展

今後は、CLILとSDGsを組み合わせた学びをさらに発展させ、生徒一人一人の思考や協働の過程をより丁寧に評価できる仕組みを整えていきます。また、ICTや生成AIの活用、地域や外部機関との連携を進めることで、より実践的な課題解決型学習を充実させ、英語力と社会的実践力を兼ね備えた生徒の育成を目指していきます。



生徒は英語を学ぶだけでなく、英語を使って社会と関わり、自ら行動する力を身に付けることができました。



INCLUSIVE PRACTICE AWARD

大阪府羽曳野市立はびきの埴生学園 石川真美教諭

支援学級 7 年生 個別最適学習×協同学習 ×おもいやり（中学校 1 年生）



フォニックスを基盤に育む
「読む・書く・伝える力」

義務教育学校の支援学級に在籍する 7 年生（中 1）を対象に、（小学校）4 年次から継続して行ってきた長期的多角的な英語指導の取組です。対象生徒には、文字認識の困難さや写し間違い、英語をカタカナで覚える学習への依存といった課題が見られました。そのため、自分の力で英語を読み、書き、伝えられる力の育成を目標としました。

そこで指導の柱として位置付けたのが、シンセティック・フォニックスとサイトワードによる帯活動です。7 年生で新出語彙をフォニックスのルールに基づいて分解・再構成した教材を活用し、「一つの音と文字の関係」を視覚的に捉えられるよう工夫しました。また、サイトワードを含む例外的な綴りを持つ単語は背景を色分けをして視覚的な識別性を高め、生徒が混乱せずに発音と綴りを結び付けられるよう支援しました。

さらに、生徒一人一人の認知特性に応じた個別支援も行いました。行を飛ばして読んでしまう生徒にはリーディングトラッカーを活用、ICT を用いた音声認識機能では、自分の発音が正しく伝わるかを確認できる環境を整えました。こうした多核的な取り組みにより、生徒は未知の単語にも主体的に挑戦する姿勢を身に付けていきました。

一方で、英語を単なる技能習得で終わらせないため、学習内容を表現活動へと発展させました。教科書の音読や内容理解を土台に、感情を込めて演じるドラマレッスンを実施しました。内容理解が難しい場面では、生徒同士がジェスチャーや絵を使って助け合いながら学びを進めました。

学習の集大成として行ったのが、生徒主体によるパペットプレイです。生徒たちは教科書の昔話を基にオリジナルの英語劇を創作し、台本作成から練習、発表までを協働して進めました。動画による振り返りも取り入れながら、「観客に伝わる表現とは何か」を話し合い、発音や演技を互いに支え合う姿が見られました。こうした活動を通して、英語力だけでなく、仲間を思いやる態度や表現する喜びも育まれていきました。

【実践のポイント】

- ❖ シンセティック・フォニックスとサイトワードの帯活動を継続し、カタカナに頼らず英語を読めることを目標に指導。
- ❖ 自作カードや色分け教材を活用し、音と綴りを多感覚的に学ぶ支援を提供。
- ❖ 未知の単語も音のルールを基に自力で読もうとする姿勢が育ち、読解速度が約 5 倍、視写速度も約 2 倍に向上。
- ❖ 教科書音読からドラマレッスンへ発展させ、内容理解と表現活動をつなげた。
- ❖ 生徒主体でパペットプレイの創作や発表を通して、英語で表現する自信が高まった。
- ❖ 生徒と出題範囲を決める「共同作成テスト」を導入し、評価を学びに変化。
- ❖ 読解速度は約 5 倍、視写速度は倍増し、全員がトラッカーなしで視写できるように。
- ❖ 生徒同士で発音を教え合ったり、友達を助けたりする協働的な姿が増え、自己肯定感や他者を思いやる力、協調性が向上。



自信や自己肯定感、他者を 思いやる力の育み

評価においては、学習者が自らの成長を実感し、意欲を高める「学習のための評価」を核に据えました。特徴的なのは、生徒自身が評価に関わる「共同作成テスト」です。定期テスト前には「自信が付いた単語」や「苦手な綴り」を生徒自身が整理しデータに基づき、「どんな形でテストに出せば、自分たちの能力を一步上に引き上げられるか」をクラスで考え、教師はこの対話に基づき、生徒が「今の自分より少し上の課題に」挑戦できる最適なテストを作成しました。

また、テストに向けては3週間で計9回の反復練習を実施、繰り返しの中で、「苦手な綴り」や「難しい英作文」を一つずつ攻略し、「できるようになる過程」を重視しました。定期テストは「努力の成果を自ら証明する場」となり、自己調整能力を劇的に向上させました。

さらに、認知特性に配慮した筆記評価として、パペットプレイの台本を読解教材として活用し、文章内容を絵で表現する課題を設定しました。これにより、生徒は自分に合った方法で理解を示すことができました。

こうした評価と指導の結果、生徒には大きな成長が見られました。まず基礎技能の面では、読解速度が当初の約5倍に向上し、視写速度も倍増しました。1学期にはリーディングトラッカーが欠かせなかった生徒も、2学期後半には文字サイズが小さくなり、語数が増加したにも関わらず、全員がトラッカーなしで正確に書き写せるようになりました。基礎力が定着したことで、認知的な負荷を劇的に軽減させました。

また、生徒の学習への向き合い方も大きく変化しました。以前は英文の上にカタカナを書かなけれ



ば読めなかった生徒が、フォニックスのルールを使って未知の単語を推測し、「まず自分で読んでみよう」と挑戦するようになりました。英語を暗記の対象ではなく、自ら解読し活用する道具として捉え始めたことは、大きな成果といえます。

さらに、協働学習を通して人間関係にも変化が見られました。早く終わった生徒が友達の学習を手伝ったり、欠席した仲間に英語でメッセージを書いたりする姿が日常的に見られるようになりました。英語劇の制作では、一人一人の特性を生かした役割分担が自然に行われ、生徒同士が支え合いながら作品を完成させました。

保護者からは「家でも自信を持って英語を話すようになった」「こんなに堂々と発表できるとは思わなかった」といった声が寄せられました。ALTからも表現力や協働的な学習態度が高く評価されました。こうした取組により、生徒は英語力だけでなく、自信や自己肯定感、他者を思いやる力を着実に育んでいきました。



「おもいやりの循環」を 学校全体へ広げる

今後は、生徒たちが創作したパペットプレイを前期課程の児童に向けて上演し、「英語で誰かを楽しませる」経験につなげていきます。4年前、文字認識に苦戦していた生徒が、今では自己有用感を大きく高め、自らの言葉で物語を紡いでいます。本実践で育まれた思いやりや協働の姿勢を学校全体へ広げ、多様な学び方や表現を認め合えるインクルーシブな学習環境の充実を目指します。

” 生徒たちは、自分たちの能力を一步上に引き上げられるテストを提案し、繰り返し取り組むことで、自らが設定した課題を一つずつ攻略していきました。

■ブリティッシュ・カウンシルの学校英語教育活動

<https://www.britishcouncil.jp/programmes/english-education>



授業改善につながる、実践的な教員研修

「言語活動中心の授業をどう進めるか」「生徒の発話をどう増やすか」など、教師が日々の授業で直面する課題に対応。理論だけでなく、翌日の授業から活用できる指導技術やアイデアを提供。



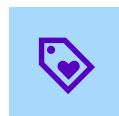
教育委員会の課題に合わせた研修・人材育成の設計

地域によって異なる「指導力のばらつき」「研修機会の不足」「若手育成」「研修のマンネリ化」などの課題に対応。自治体の状況や目標を踏まえてプログラムを設計。



研修の学びをやりっぱなしにせず、確かな「授業改善」を導く

研修を受けて終わるのではなく、学んだことを授業で実践し、振り返り、改善するサイクルを重視。



国際的な知見を、日本の教育現場に合わせて活用

ブリティッシュ・カウンシルの国際的な知見を、日本の教育現場に最適化。

学習指導要領や日本の学校・自治体の実情を踏まえて研修や支援に生かす。



「英語教育ニュースレター」及び教育委員会向け『英語教育情報』のご登録

<https://www.britishcouncil.jp/programmes/english-education/updates/newsletter>



■ブリティッシュ・カウンシル

ブリティッシュ・カウンシルは、文化交流と教育機会を促進する英国の公的な国際文化交流機関です。私たちは文化芸術、教育、英語を通じて、英国とその他の国の人々の間につながりをつくり、理解と信頼を育みながら、平和と繁栄を築くための支援を行っています。世界200以上の国や地域の人々と、また、100以上の国において活動し、2024年度は、6億人がオンライン、放送、出版物を通して私たちが提供する情報にアクセスしました。

日本では1953年に活動を開始しました。英会話スクールや英国資格試験の運営、教育機関・企業向け英語研修、英国留学情報の提供、英語教員への研修、高等教育や文化芸術分野での国際交流支援などを行っています。2023年、日本と英国のつながりを築く私たちの活動は70周年を迎えました。

ブリティッシュ・カウンシル公式ウェブサイト：www.britishcouncil.or.jp